

# 実学という名の非実学、そして非実学という名の実学

—大学教育編—

● 村 越 行 雄

大学教育に対する社会的要求として、最近では、実学重視の傾向が強く出されている。その他にも、大学をサービス産業とか、ビジネスの経営方法とか、従来の大学では考えられない大学像として捉え直そうとする傾向も強く出されている。こうした現状を「実学」という概念を利用しながら分析していくことにする。実学重視とは、どういうことなのか？実学偏重なのではないのか？実学でない学問など、この世に存在するのか？様々な疑問が浮かんでくるであろう。

最初に、実学という言葉に対する世間の一般的なイメージから始めることにする。具体的には、一般的に使用されている国語辞典から見ることにする。下記のリストは、ある大型書店で、棚にある一般的な国語辞典を意図なしに手に取った順序で並んでいるにすぎないものである。

- (1) ベネッセ新修国語辞典「習ったことがそのまま実際の生活に役立つような学問。」
- (2) 小学館新選国語辞典「実際生活に役だつ学問。」
- (3) 新潮現代国語辞典第2版「理論より実用を重んずる学問。文学・哲学に対する工学・商学など。」
- (4) 講談社国語辞典第3版「実際に役立つ学問。」
- (5) 明治書院精選国語辞典「理論よりも習ったことが実際に社会生活の中で役立つことを主にした学問。」
- (6) 学研現代新国語辞典「現実の社会・産業を直接発展させる、実利的な学問。実用的な学問。」

- (7) 岩波国語辞典第6版「理論よりも実用に重きを置く学問。」
- (8) 清水書院要解国語新辞典「実際の生活に直接役立つ学問。」
- (9) 三省堂新明解国語辞典第6版「習った知識が、直接社会生活に役立つ学問。〔狭義では、医学・商学・工学などを指す〕⇔虚学」
- (10) 三省堂現代新国語辞典第3版「実際の生活にそのまますぐ役立つ学問。医学・商学・工学など。」
- (11) 三省堂国語辞典第6版「実際生活にそのまますぐ役立つ学問。医学・商学・工学など。(⇔虚学(哲学・文学など))」
- (12) 旺文社国語辞典第10版「理論より実際の役に立つことを目的とする学問。農学・医学・工学・商学など。」
- (13) 福武国語辞典「学習した知識や技術が、社会生活に直接役立つような学問。商学・工学・医学など。」
- (14) 角川新国語辞典「実際生活に役立つ学問。」
- (15) 角川最新国語辞典「習ったことが実際の生活に役立つ学問。」
- (16) 角川国語辞典新版「実際の役に立つ学問。」(角川学芸出版)
- (17) 小学館新解国語辞典第2版「習った知識が実際の社会生活に役立つ学問。」
- (18) 大修館書店明鏡国語辞典「習得した知識や技術がそのまますぐ社会生活に役立つような学問。商学・工学・医学などの類。」
- (19) 小学館現代国語例解辞典第4版「習った知識や技術がそのまま社会生活に役立つような学問。商学、工学、医学など。」
- (20) 集英社国語辞典第2版「《口頭》実際の生活に役立つ学問。」
- (21) 集英社新修広辞典第5版(実学の記載なし)
- (22) 金園社国語大辞典「実際に役に立つ学問。(practical learning)」

以上の国語辞典の定義を見ると、記載の全くないものから、かなり突っ込んだものまで、さまざまであるが、全体的には似たようなものばかりで、漠然として、曖昧なもののように思えるが、そこにはいくつかの基準となるものが見出される。

第1は、実際に役立つ学問というものである(4、14、16、22)。現実性・事実性と有用性が基準となっている。しかし、具体性がなく、曖昧で、何に対して、どのような対象で、実際に役立つかは、不明である。

第2は、対象領域が実際の生活・實際生活や社会生活に限定されているものである。(1、2、5、8、9、10、11、13、14、15、17、18、19、20) この基準が最も多く、実際の有用性は、私たちの日常的な生活に関係するものになっている。

第3は、そのまま・直接・すぐにというものである(1、6、8、9、10、11、13、18、19)。変形・変更なし、直接性、即時性が基準になっており、手を加えて変形・変更しないで、しかも間接的ではなく、あくまで直接適用できるものであり、しかも時間的には長い期間を経るのではなく、非常に短期間の内に適用できるものである。

第4は、習ったことが知識や技術に限定されているものである(9、13、17、18、19)。習ったことという一般的な言い方ではなく、知識や技術に限定している、あるいは明確にしていることが基準になっている。これは、知識や技術をどのように定義するかで、大きく異なってくるが、単なる感覚的なもの、体験的なものなどは除外することを意味するのであろう。

第5は、理論とは反するものであるとされているものである(3、5、7、12)。理論より実用を重んずるとか、理論よりも習ったこととか、理論より実際の役に立つとか、それぞれ表現は異なるが、理論と実践を比較した場合、理論ではなく、現実の実践的な側面を中心にするのが基準になっている。

第6は、実利的な学問とされているものである(6)。他にはない、かなり踏み込んだもので、実際の利益あるいは効用を目的とするという基準が示されている。ただ、この利益・効用が具体的にどのように解釈されるべきなのかは、不明である。単なる金銭的な額のみを目的にしているのではないであろうが。

第7は、社会・産業の発展に関わるとされているものである（6）。これも、かなり踏み込んだもので、現実の社会・産業を直接発展させることを目的にしている点で、ある一定方向に特定化された基準として捉えることが出来る。

第8は、虚学の対立語とされているものである（9、11）。ただ、虚学という言い方には、極めて納得の行かない部分が多くあるが。

第9は、具体的な研究領域が示されているものである（3、9、10、11、12、13、18、19）。実学の具体例としては、医学、商学、工学が挙げられ、その順序が異なることも、興味深いものがある。なお、その他に、農学を加えているものもある。そして、虚学の具体例、あるいは実学に対立する具体例としては、哲学と文学が挙げられている。この基準は、具体例が示されているだけに、ある程度明確であるが、逆にその妥当性に疑問も生まれるであろう。

その他の基準は、例えば、マスコミなどの報道で示される大学における実学のイメージからも見出すことができる。それは、また世間一般の人が抱くイメージとも言えるものである。

第10は、大学卒業後の就職に有利になることである。より良い条件の就職に就くことを大学への受験勉強と在学中の勉強の目的とする傾向は、非常に強く、広く浸透している。

第11は、少し露骨であるが、金儲けと物質的に豊かな生活を実現することである。これは、学生中に起業家になったり、株で儲けたりすることもあり、単なる企業への就職だけに止まるわけではないことを表す。

第12は、社会的需要が大きいところで応えることである。ある時代に、ある地域で、社会的に必要とされている、注目されている領域があり、それに対応する学問領域に所属することで、自らの欲求を満たすことである。例えば、日本では、企業の生産活動の近代化・高度化によって、工学系の大学や学部に人気上がり、就職も有利になった時期があったし、また国際経済・金融がグローバル化によって重要視されるにつれて、

マネジメント関係の大学院や学部が脚光を浴び、多くの学生が入ってきており、時代と地域の特徴によって、変化することになる。

第13は、資格を取得することである。教員に関する資格から、図書館司書、学芸員など、さらには言語、コンピューター、美術、その他に関する資格まで、在学中に取得できる資格の数量的な多さをアピールしている大学は沢山ある。

第14は、外国語の運用能力を獲得することである。英語を初めとして、フランス語、イタリア語、スペイン語など、最近では中国語、アラビア語など、外国語について、特に運用能力の獲得を重視する大学が多く、その為に様々なカリキュラムを提供している。

第15は、すぐに直接使用できる即戦力のあるものである。演習、実習、実技などによって、コンピューターの操作技術、レポートなどの文章作成技術、プレゼンなどの発表技術、コミュニケーションの技術などを習得する。これらの技術の習得は、大学卒業後の就職というよりは、大学を無事に卒業するために必要なもので、まさに今すぐに使用できるもので、大学生にとって必要不可欠な技術である。

その他にも基準となるものはあるが、共通している点は、practical=vocational という捉え方であろう。つまり、大学卒業後の就職は勿論であるが、社会生活全般の技術(話し言葉と書き言葉の文章の作成と表現、広く人間一般のコミュニケーションの取り方など)などを含む、職業訓練的な要素が実学的なものとして捉えられていることである。言い方を換えれば、小学校、中学校、高校が、中学受験、高校受験、大学受験を目標とし、その目標の達成へのプロセスとして自らの存在意義を認識しているのと同様に、最近では、大学は就職を目標として、その達成へのプロセスとして自らの位置づけを行っており、その現われが実学重視の傾向なのである。

次に、第1から第15までの基準を少し詳しく検討してみることにする。

第1の基準は、実学を実際に役立つ学問とするもので、非常に曖昧で、

何も言っていないのと同様に思えるかもしれないが、国語辞典の特徴で、特定の領域に限定するのではなく、不特定の、あらゆる場合にも適用できるように定義したための曖昧さと言える。それでも、私たち人間が生きている現実・事実に基づくかどうかの現実性・事実性、それに役に立つかどうかの有用性が加わり、現実主義的・実用主義的な特徴を表示することになり、理論的・理想的・抽象的・観念的な、実現性のない、実行性のないことへの対立と否定を意味することになる。このような基準は、実学にとって、決して悪い出発点ではないと言えるが、商学・工学などが実学的で、哲学などが非実学的であるという結論を示唆することはなく、その意味では、むしろ評価されるべきものであると言えるかもしれない。

第2の基準は、人間が生きていく全場面を実際の日常生活や社会生活に限定することであるが、この世には日常生活・社会生活しか存在せず、それが全てであると考え人は多く、そのような人にとっては、第1と第2は同一のものになってしまう。しかし、生きていくことと生活することは、全く同一なのであろうか？日々の生活だけでなく、その上にも（観念的な世界など）、その横にも（非日常的な世界など）何かが存在していると思える。何かは何であるのかは、人によって異なるであろうが、少なくとも第1と第2は、区別して考える必要がある。

第3の無変形・無変更、直接性、即時性は、実務的、実地訓練的、職業訓練的な特徴を端的に表すものである。今習ったことが、習った後いつでも使える。まさに習ったことをそのまますぐに直接使うことなのである。例えば、コンピューターに関する講習会終了後、コンピューターを操作できるようになる。つまり、簡単な技術の習得ならば可能であるということになる。しかし、習って使うという単純で、簡単なものばかりで社会や人間が出来ているわけではない。多くは、複雑で、多種多様であり、習ったことに何らかの手を加え、変形し、変更し、時には何らかの媒介・仲介を通して間接的に行うことも必要であり、そしてじっく

り時間をかけて、長期的な展望に立って将来のために行うことも必要不可欠な場合がある。そこで、複雑で、多種多様なものを第3の基準に基づいて行うためには、ある種の操作が必要になる。複雑・多種多様なものを幾つかの段階に分解し、単純・簡単なものになるまで分解を続け、単純・簡単なものになった時点で、そのまますぐに直接実行できるようにするために、さらに細かい部分に分解して、それらをマニュアル化し、手続きの流れを誰でも理解でき、誰でも習得でき、誰でも実行できるようなマニュアル作りが絶対に必要になってくる。そして、そのようなマニュアルに基づくものならば、実学的であると言える。

第4では、習ったことが知識や技術に限定されることである。つまり、私たちが習うことのできるものは、無限とまでは行かなくても、多数あるのであって、その内、明確に実学的であると言えるのは、知識と技術に限定されてしまうということである。しかし、知識や技術をどのように捉えるのか？知識や技術という形を取らないものは、どうするのであろうか？様々な疑問が生まれるが、その解答も単一的で、一様的ではない。知識という固定化された客観的なものにはまだ至らない段階で、信念、感覚・感性、想像などの要素に基づくものも多く習っていくのであり、また技術にしても、技術や技とは呼べないようなものも多く習っていくのである。言い換えれば、実際の生活や社会生活には役に立たないようなものも習っていくのが、世間一般の人の人生と言える。

第5の理論との関係は、上記とは異質なものとなろう。理論と実用との関係について、非実学と実学との関係として捉えるのは、かなり無理な考え方である。理論が全て実際の役に立たないとするのは、妥当性がない。そこで、実際の役に立たないのではなく、あくまでも実際の生活・社会生活に役に立たないとすれば、多少可能性は出て来るであろうが、それでは、私たちの生活には、理論など役に立たないものが不要であると断定できるのであろうか。実用という実践的な側面を重視するのは理解できても、それを理論不要説に結びつかせるのは危険であろう。勿論、日々の

日常生活の中では、理論に基づかない実用のみが多いのかもしれないが、理論に裏づけされた実用も多く、さらには理論そのものが現実的に極めて有効になることもあり、単純に理論との対比・対立関係で捉えるのは、問題をさらに見えにくいものにしてしまう。

第6は、むしろ第10～第12に近いものである。実利的な学問という基準は、世間一般の人が抱いているイメージに類似したものであろう。例えば、大学やその他のところで、実学という言葉を知ると、一般的には何らかの利益がもたらされると思うであろうし、少なくとも机上の空論のように、何の役にも立たないつまらないものとは考えないであろう。しかも、その利益は、目先にある、すぐに手に入るものという感じであろう。そして、実学の意味合いは、実用から実利へと移行しているのが、現在の世界的な傾向であると言える。複雑から単純への移行、観念から現実への移行、内面から外観への移行、間接から直接への移行、将来(長期的展望)から今(即時)への移行など、またマニュアル化、さらにグローバル化などは、同様の傾向を示すものである。

第7は、社会・産業の発展という基準で、実利と同様、かなり現代的な意味合いを持っている。社会を発展させるとか、産業を発展させるとか、どういう意味なのであろうか？個人レベルで考えれば、社会や産業そのものを直接発展させることを目的とするのか、それともあくまでも個人の発展(利益)を目的とし、その結果間接的に社会や産業を発展させるのか、いずれかであろう。そして、国語辞典の(6)は、前者の方である。しかし、例えば、大学教育の場合、私たちは自分という個人の発展(利益)のために教育を受けるわけで、その過程の一部として社会や産業の発展に寄与するのであって、(この場合は、ある個人が入社する、ある特定の企業の発展を通して、産業の発展、さらには社会の発展へと寄与していくことになる)社会の発展や産業の発展を初めから目標としているわけでないように思える。ここにも、上記の傾向と同様のものがある。全体(集団)から個への移行、一様から多様への移行など



の世界的な傾向である。つまり、社会や産業という全体の発展を主目的とし、その結果として個人の発展があるのではなく、逆で、個人の発展を主目的とし、その結果として社会や産業という全体の発展へと結びつくことである。ともかく、実際の生活や社会生活ではなく、特定化し、限定して、現実の社会・産業にすることは、現代的であり、それなりの意味も勿論ある。ただし、生活の中に社会・産業を含めているのか、また反対に、社会・産業の中に生活を含めているのか、国語辞典の定義では不明で、従ってここで確定的には言えない。

第8と第9は、虚学という対立語と具体的な研究領域の特定化に関するものである。虚学という言葉自体、現在ではあまり使用されていないので、本稿では非実学という言い方をする。そこで、実学の例としては、医学、商学、工学、農学が挙げられ、非実学の例としては、哲学と文学が挙げられているが、これが世間一般のイメージであろう。哲学や文学をやっている人は、何の役にも立たない変人のように映るのであろう。そして、実学の例の順序が国語辞典によって異なっていたり、農学が入っていたり、いなかったりしている点は興味深いものがあるが、人々の健康を扱う医学、日々の販売・購入などのビジネスを扱う商学、日々私たちが使用している交通機関、家電製品、コンピューターなどを扱う工学、毎日何度か口にする食料品などを扱う農学などは、実際の生活・社会生活になくてはならないもので、どれ一つが欠けても、生活が成り立たなくなる重要な要素であり、また産業・社会を形成し、発展させるための重要な構成要素でもある。しかし、これらは、私たちの日常生活を物質的な側面から見ているのであって、非物質的な側面（例えば、精神的な側面など）なしに生活を定義すれば、これで十分となるのかもしれない。ただ、毎日健康で、必要な物を売買し、便利で、高度な機械を使い、十分な食料を得ていれば、それだけで満足なのであろうか。もしそうでなければ、非物質的な側面を入れるために、実際の生活・社会生活を拡大解釈するか、さらには産業や社会の解釈を見直すか、それとも第

1の基準のように、実際に役立つ学問とし、生活・産業・社会などへと特定化・限定化しないことである。

第10から第15では、とくに大学教育における実学的意味合いが扱われている。小学校・中学校・高校と続き、大学で一応学校教育が終了し、社会人として初めて社会の一員になり、それから死亡まで継続していく。従って、社会の構成員として非常に長い期間、つまり人生のほとんどの期間を過ごしていくには、それなりの準備が必要になってくる。その準備は、とくに大学の在学期間中に集中し、4年間で何らかの形あるものを作り上げていく必要が出てくる。何らかの形あるものとは、何か？社会で生活していくために必要な経済的な基盤作りを目指すのか？社会の構成員として要求される条件を満たすことを目指すのか？人間個人として不可欠な資質を上げることを目指すのか？その他にも、4年間で何のために費やすかは、人それぞれで、個人レベル、集団レベル、社会レベル、世界レベル、人類レベルなどに応じて、多種多様になる。一例を挙げれば、人類の発展と平和のために知識と活動に4年間で費やす人もいれば、世界経済への関わりのために理論と研究と調査に費やす人もいれば、社会の不利な階層の人を救済する活動に参加するために研究と調査とボランティアに費やす人もいれば、家族の介護のためにアルバイトと両親の世話に費やす人もいれば、音楽や絵画などの自らの芸術の才能を伸ばすために費やす人もいるという具合に。ただ、一般的には、あるいは最大公約数を取れば、社会で生活していくために最低限必要な経済的基盤を継続的に確保していくことが第一で、そのために就職が目的になり、しかもより良い条件の就職が目標になる。そして、より良い条件の就職を手に入れるためには、給料の良さが最重要であり(第11)、その時代、その社会で脚光を浴びている業界、業種などに関連する学部、学科に所属することが有効であり(第12)、またいろいろな資格を取り(第13)、数カ国の外国語をマスターし(第14)、さらにコンピューター力、文章表現力、コミュニケーション力などの即戦力のある技術を習得

すること（第15）などが条件になると言える。

最後に、大学教育における実学と非実学の意味について、考えてみる。これまで、実学に関する国語辞典の定義とマスコミなどの報道による人々の抱くイメージを分析してきたが、これらの分析結果を利用しながら、大学教育の姿を示していくことにする。

最近では、よく実学主義という言葉が叫ばれているが、大学教育に実学重視の方法が導入された背景には、いくつかの理由が考えられる。一つ目には、過去の大学の権威主義的な特徴がある。社会から隔離され、むしろ社会の上位に位置し、治外法権的な特権を有した大学は、誰からも、何からも侵されることのない権威を持ち、理論的、抽象的、観念的な学問を追求することを目的とし、高尚で、崇高な研究と教育を行うところであり、その対極にある実学に対しては、軽視あるいは蔑視の感覚を持つことになった。二つ目には、過去の大学の反産学協同主義的な特徴である。大学と産業界は、協同する関係ではなく、相容れない、排他的な独立した関係にあり、高尚で、崇高な研究と教育を行う学問の場としての大学は、産業界のために研究をすることはなく、また卒業後の就職のために大学教育を変更することもなく、学の独立を保障する場であった。三つ目には、過去の大学のエリート主義的な特徴である。一部の特権階級のエリートのみが大学に入学できるのであって、一般大衆は除外されていた。エリートが受けるべき教育は、一般大衆の子弟が必要とする知識や技術であってはならず、非実学的なものとなった。

以上のような過去の大学への反発・否定・変革の結果として、実学主義的な方向性を特徴とする大学教育が誕生してきた。そこにはそれなりの理由があり、そしてそれなりの妥当性がある。世界的に、高度技術社会、高度情報社会、高度経済・金融社会など、あらゆる面で高度化し、従って複雑化、緻密化、細分化、多様化などを特徴とする、従来には存在しなかった社会システムが出来上がり、その中で人々は生活していかなければならないようになった。また、社会の発展に伴い、産業界は研究開発

や有能な人材確保のために、大学との協同関係の必要性が飛躍的に増加してきた。さらに、大学側も、学生確保や規模の拡大のためには、エリートだけでなく、一般大衆の子弟をも対象にしなければならなくなり、卒業後の就職に関連させた魅力づくりによって優秀な学生の確保を狙い、産業界との関わり、そして社会との関わりを求めなければならなくなった。このようにして、大学は、社会の一員として、社会の核として位置づけられ、産業界との協同を進め、一般大衆の子弟を大量に入学させることで、大衆化してきたのであって、その過程の中での実学主義的な方向性は、十分理解できるものであった。

しかし、大学教育に実学主義的な方法性を認めるとしても、何でも手放しで認めるわけにはいかないであろう。そこで、実学ということの意味が、重要になってくる。もし実学という意味が、実際生活・社会生活に対するものであったり（第2基準）、知識や技術に限定されるものであったり（第4基準）、実利的な学問であったり（第6基準）、社会・産業の発展のためであったり（第7基準）、就職のためであったり（第10基準～第15基準）するのであれば、現在の一般的動きは納得のいくものと言えるのかもしれない。しかし、第3基準のように、「そのまますぐに直接に」という無変形・無変更・直接性・即時性は、習ってすぐに使えるという利便性はあっても、裏を返せば、時間的、空間的な広がりから見れば、恒常的な可変性を意味することになる。例えば、在学中に習ったある知識や技術が卒業後大きく変わり、新しい知識や技術を再び習得しなければならなくなり、時間的な推移に伴って、絶えず変化（発展・進化？）する知識や技術の習得のために繰り返し習得しなければならなくなる。つまり、現時点で最も実学的と思われたものが、次の瞬間に非実学的なものになり、別のものが実学的なものになってしまうのである。とくに、現在のように、社会や世界が絶えず急激に変化し、多様化する時代では、「今日の実学が明日の非実学になる」可能性は極めて大きいものとなる。

非実学の代表例にされている哲学や文学は、どうであろうか？勿論、それらの他にも、非実学的と思われているのは多くある。第1基準によると、どうなるであろうか？生活を単なる物質的な生活だけでなく、非物質的な生活をも含めれば、つまり、単に生活するのではなく、真に生きるとするならば、哲学のような非実学的とされているものが実際には非常に役立つものになる。第1基準の曖昧さは、非実学的なものが実は真の意味での実学的なものであると捉えることを可能にさせるのである。また、第3基準を否定し、長期的な過程で変形や変更を認め、間接的な適用をも認めることで、あらゆる研究領域は、例外なく実際に役立つもので、実学的なものと考えられる。さらに、第5基準を批判し、再検討することで、理論をそのまま否定するのではなく、例えば、一般・特殊・個別という分類方法を利用すれば、非常に抽象的で、観念的な一般理論、各領域の中での特殊理論（一般理論よりは、具体性が増すが、抽象的であることには変わらない）、非常に具体的な個々の事例の個別研究の分類によって、実際生活・社会生活には一般理論は必要なくても、特殊理論は必要であり、それを支えているのが一般理論と言える。つまり、一般理論は特殊理論を支え、特殊理論は個別研究を支えるという関係が成り立ち、実際生活・社会生活に見られる実学的なものは個別研究の部分であって、その背後には特殊理論と一般理論が存在し、その背後なしには、実学が絶えず非実学になる宿命を負うことになる。そして、一般理論はそれ自体としては何の役に立っていないように見えても、特殊理論を支えるのに必要不可欠なものであり、その意味で実学的なのである。

結局、実学が非実学になってしまい、非実学が実学になるという一見矛盾したように思える関係が、今まさに私たちが抱えているジレンマなのである。それは、表題のように、実学という名の非実学、そして非実学という名の実学なのである。